

OB・OGの職場探訪

読売巨人軍トレーニングコーチ補佐

会田有志さん（2006年文学部卒）

京王線「京王よみうりランド」駅から、「巨人への道」と呼ばれる急な階段を10分ほど上りつめた丘の上に「読売ジャイアンツ球場」がある。ここが、元巨人軍投手で東京ドームのマウンドにも立った、その人の今の仕事場だ。三々五々、選手が練習しているグラウンドを見回すと、右翼フェンス際にその人の姿があった。背番号「103」、読売ジャイアンツトレーニングコーチ補佐の会田有志さんだ。

コーチ2年目、選手の兄貴分
一番早く来て、一番遅く帰る

右翼フェンスには、この日の練習メニューが書かれた2枚の紙が貼られてある。会田さんは、それを確認しながら、選手一人一人の動きを見守っている。ダッシュを繰り返す選手にはゲキを



会田有志さん

飛ばす。しかし、ピリピリした雰囲気はない。選手はみんな明るく伸び伸びと練習している。会田さんは最も若いコーチで27歳。選手にとつては兄貴分的な存在だ。

練習は試合のない日は午前9時半から始まる。

会田さんは練習開始前にだれよりも早く球場入りする。練習が始まると、笛を吹いてリードしながら選手たちと一緒にジョギングする。午前中はグラウンドで、昼食をはさみ午後からは室内練習場に移ってウエイトトレーニングする選手をコーチする。会田さんはすべての選手の練習が終わるまで立ち会おうので、練習場所を離れるのはいつも一番後だ。

「練習が終わってからは、その日の選手個々の体調や気がついたことを記録します。選手は自分のために練習するのが仕事。コーチは選手が少しでも上に近づけるようにするのが仕事で、自分のために頑張る選手とは違う」。こう語る会田さんが、すべての仕事を終えて球場を出るのは、毎日夜8時を過ぎる。

第2の二軍の若手を育成
自主性重視し、体力づくり

巨人軍には一軍、二軍の他に高校を卒業したばかりの若い選手や育成選手など、まだ体ができていない選手が多い第2の二軍がある。会田さんは主に第2の二軍の選手のトレーニングコーチをしている。若い選手の体を鍛え、プロの体にする。それが仕事だ。

「選手に気付けさせること。それが一番大切です」



と会田さんは強調する。選手にいろいろ指示して、それを選手がそのままやるというのではなく、選手自らが考えてやらなければいけないことに気付かせる。「やらされている練習はダメ。身につかない」という。

選手の自主性を重視する会田さんは、「選手か

ら聞かれたことに答える」ようにしている。選手に気付かせるように仕向けることはしても、選手が気付く前に、「こうしろ」とは言わない。選手を引退後、米国アリゾナ州でトレーニンングコーチの勉強を行ったときに、これを学んだ。

巨人軍に7巡目で指名 選手生活は短く4年間

会田さんは「もともと指導者になりた
いと思っていた」という。佐野日大高校
から中央大学に進学し、1年生で取得
した単位はわずか「1」。野球部に専念、
勉強をおろそかにしたからだった。しか
し、そこから一転して2〜4年生では猛
勉強し、卒業した。一念発起して勉強に
励んだのは、野球部で1年やって「自分
はプロ野球で通用する体格ではない」と
感じたからだという。

選手の自主性を重視する会田コーチ（右端）

壁にぶつかり、野球の指導者への道を
考え出していた会田さんだが、大学2年
の冬にひとつの転機が訪れる。当時、野
球部の臨時コーチをしていた野球部OB
で元巨人軍投手の高橋善正さん（現、中
央大学野球部監督）が、会田さんの投球
を見て、「あれ、いいじゃないか」と目



読売巨人軍のジャイアンツ球場

をつけてくれたのだ。

それを機に公式戦にも登用されるようになった
会田さんは、3年生ではエースになって活躍。3
年秋のリーグ戦では4勝を挙げて、中央大学の25
年ぶり24度目の優勝に貢献した。「高橋さんのあ
の一言には本当に感謝しています」という。

2005年の大学・社会人ドラフト会議で巨人
軍に7巡目で指名され、晴れてプロの道へ進んだ



笑顔でインタビューに応える会田コーチ

会田さんは、元プロ野球選手の父親（会田照夫さん）と肩を並べた。しかし、プロ野球選手としての人生は4年間（2006〜2009）で終わり、2009年11月8日に引退表明した。アンダースローで鳴らした1軍での投手成績は3勝2敗だった。

プロ野球の選手生活は短かったが、会田さんにとっては「やることはやったので、とても充実していた」というほどに満足できるものだった。

コーチ転身への誘いに即決 前からなりたかった指導者

選手引退を決意したきっかけは、球団から「コーチにならないか」という誘いがあったからだ。

会田さんはその場で、引退してコーチになるという決断をした。「自分のことは自分で決める」と誰にも相談しなかった。「後輩たちの面倒を見るのが好きで、指導者になりたいという気持ちがある」ともあつたので、決断は一瞬でした」という。

球団からは2ヶ月後からのコーチ就任を打診されたが、「やるならすぐにやりたい」と申し出て、球団から誘いがあった次の日にはコーチ業に就いた。引退後のオフには米アリゾナ州にコーチ留学し、転出への変わり身は早かった。

25歳の若さでプロ野球コーチに転出した会田さんが、トレーニングコーチとして今一番楽しみにしているのは、「若手選手が1軍に行つて活躍してくれること」だ。「選手の活躍は自分のこと

ように嬉しい」という会田さんだが、投手のコーチではないので、ピッチングフォームや投球術などのアドバイス、指導はしない。あくまでも若い選手の基礎体力づくりを手助けするのが仕事だ。

「指導者で一番になる」が夢 アマチュア野球界も視野に

「投手コーチだと専門に投手をみます。でもトレーニングコーチは投手はじめ野手、すべての選手をみます。将来、最多勝投手や首位打者、ゴールデングラブ賞をとるような選手を育てているので、ずっとやりがいがありますよ」とも語つてくれた。将来、監督を目指すなら、いろいろなポジションの選手をみるトレーニングコーチの体験が活きてきそうだ。

トレーニングコーチとして日々勉強中の会田さんの夢は「指導者で一番になる」ことだ。最近では、野球が盛んなドミニカ共和国に勉強に行き、海外と日本の練習の違いを学んだ。「海外の練習方法を日本にも取り入れるべきです」と熱く語る。

会田さんはプロ野球の指導者だけでなく、高校、大学野球などアマチュア野球の指導者にも興味があるという。選手生活とは縁が切れたが、これらの野球人生は「無限大」に広がっている。

（学生記者 書間祐亮 法学部2年）